



田尻の集落の中心にある日枝神社



「尻(しり)」という字は、人間のお尻とともに、ものの末端とか、はずれといった意味をもっています。そうすると、田尻は田んぼのはずれ、広がった田んぼの末端ということになるのかもしれませんが。

現在の国道14号線が通るあたりに「市川砂州」が形成されてからも、その南部に広がる遠浅な海には、新しくいくつかの砂丘ができました。その砂丘上に人々が住み始め、二俣、原木、高谷、田尻、稲荷木などの集落が誕生しました。そして、湿地となっていた市川砂州と砂丘との間が干拓されていき、中世末期にはその一部が水田として耕作されていたものと思われま

水田の一番はずれ

田 尻

れた水田の一番はずれに当たるところから「田尻」の地名になったものでしょう。田尻の集落の中心には浄経寺、日枝神社、円福寺などの寺社が建っています。村の中央を通る道は、後に成田参詣でにぎわい、「成田道」と呼ばれるようになりますが、この道は当時の海

岸につくられたものでした。今日では想像できませんが、この海岸では江戸時代初期まで行徳塩浜の一部として、塩田を造って製塩が行われていました。しかし、高谷、妙典などの土地が田尻海岸の前に広がってきたため、田尻の海は入江のような状態になり、製塩には向かなくなってしまうました。そして、享保二年(一七一七)八月、台風の高波のため、塩浜の囲堤(塩田を囲った堤)が大破したことをきっかけに、ついに製塩が行われなくなりました。

明治二十二年、田尻は行徳町に属しました。明治末年から大正期にかけて行われた江戸川放水路(現江戸川)開削と耕地整理のため、土地の一部が江戸川の川底になりました。しかし、その結果、耕地が整理されて八幡、鬼高方面に広がる水田地帯が出現しました。

昭和三十五年四月、鬼高南部を横断する京葉道路が完成すると、沿道周辺には工場施設が建設され、目覚ましい勢いで地域は変化していきました。昭和四十八年には住居表示が実施され、京葉道路の南部地域が田尻に含まれることになりました。また、北西隅の市川インターチェンジから南に走る行徳バイパスが、稲荷木との境界に決まりました。

今回は「行徳地域の新町名(1)」を予定しています。

(社会教育指導員

綿貫喜郎)

田尻が記録に表れるのは江戸時代に入ってからのことです。海に面した田尻周辺の地形からみて、開発さ